
そして勇者は受け継がれる

傘月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして勇者は受け継がれる

【Nコード】

N9040N

【作者名】

傘月

【あらすじ】

「哀愁」をテーマに、某有名ゲームのみんなのトラウマをモチーフに書いて書いた短編小説です。

原稿用紙11枚ぐらいなんで、お暇なときにどうぞ。

もう何十年前になるんだろう。小学生の時、俺は親父と毎日のように冒険に出掛けていた。テレビ画面に表示される俺と親父の分身となった勇者を操作して、さらわれた姫を助け出して竜の王を倒したり、勇者の血を引く王子になって仲間を捜し出して魔物の大神官と邪神を倒したりしていた。一人のキャラを二人があーだこーだ言いながら操作するから、時には喧嘩になり、時には知恵を出し合い……それはとても楽しい日々だった。

そんな親父は、俺が中学に入ってすぐぐらいの時、失踪した。沖縄に行く、と言って船に乗ったが最後行方が解らなくなったのだ。冗談みたいだが本当の話だ。

俺に残されたのはたった一枚の紙きれ。「ふっかつのじゅもん」。いわゆる今のゲームでいうセーブデータのようなもので、ゲームをやめるとき王様から聞き出したり道具を使ったりで、次回やり直すときのパスワードとなる、それだけ読むとなんの意味のない言葉の羅列をメモしたものだ。

しかし悪筆な親父にこのメモをさせるとんでもないことになる。まず読めないから解読から始まり、やっと解読できてもその解読が間違っていて弾かれる。ラスボス手前でメモが解読不能になったこともありそのとき俺は本気で泣いた。

それからふっかつのじゅもんを書くのは俺が行っていた。しかし親父が沖縄に行くという前日は、めったに出ない上に逃げ足の速いレアな敵を倒し、経験値をしこたま稼いで二人して機嫌良くゲームをし、調子に乗った親父が勧めてきた日本酒を呑んだ俺は、ひり辛いそれをちよつと呑んだだけでなんだかほわほわしてきて、

よく解らないうちに眠ってしまったのだ。

なのでその日に限って親父がメモを残し、朝起きたらテーブルの上にそれは置かれていた。きつと酔っ払って書いたのだろう。相変わらずの悪筆がさらに酷くなっており、もしかしたら日本語じゃないんじゃないかと思うような、文字数すら解らないような有様だった。昨日の行動がパーになったと絶望し、親父が帰ってきたらなんて書いてあるのか問いただしてやろうと思っていた。

だが、親父は帰ってこなかった。ずっと、ずっと。

それから家は嵐のように大変になった。母さんは毎日親父関連のたくさん書類と戦いつつパートを始めて俺たちを食わせ、妹はまだ幼くてわけが解らないようで毎日のように「お父さんはいつ帰ってくるの？」と口にし、どうしようもなく途方に暮れた状態の俺は中学で人付き合いがうまくいなくて絵に描いたような不良になった。

失踪、というのは結構役所の手続きが大変で、「いつそ死んでくれているなら母子家庭手当なんかも簡単に受け取れるのに」、と母さんはばやいた。それを聞いた俺は拳を思い切り壁に当てて、穴を開けた。親父が死んでくれたら良かったなんて言われたくなくて、カツとこみ上げた怒りが俺をそうさせた。その穴は今も残ったままで、実家に帰りそれを見ると若気の至りを見せつけられているようでちよつと気恥ずかしくなる。

そんな何もできない俺でも、ただ一つやり続けたことがあった。ふっかつのじゅもんの解読だ。そんなことしてもなんの意味もないのは解っていた。それでも、正しいふっかつのじゅもんを入れたら親父が帰ってくるんじゃないかという、バカみたいな淡い期待をどこか心の隅の方で、ほんの少しだけ持っていた。何度も何度も挑戦し

た。覚え立てのタバコを吸いながら一晩中親父の置き土産とにらめっこをした。

何十回目の「ふっかつのじゅもんがちがいます」が表示されたとき、苛立ちから机を殴った。何百回同じメッセージを見て、今度は椅子を蹴った。どう見てもミミズ文字は日本語に見えなくて、必死でそれっぽいモノを入力するがどれもこれも駄目だった。

途方に暮れるほど長い時間、何度も何度も入力を繰り返しているうちに、自分が泣いていることに気付いた。「哀しい」とか、「寂しい」とか、そういう感情はすくなくならずあつたが、なんだか中身はからっぽな気がして、からっぽなのに涙が止まらなかった。もしかしたらあのからっぽの感情は、元は親父が帰ってくるという希望が入っていたのかも知れない。哀しい寂しいという器に入った微かな希望、それが涙になって、外へ流れ出ていったような、そんな気がした。

泣きながらもう一度だけ挑戦してみる。慎重に文字を選んで、決定を押す。

「ふっかつのじゅもんがちがいます」

親父はもう帰ってこないだろう、という事実を、俺はあのときやつと受け入れた。失踪から半年が過ぎていた。

.....

「『ちなみれつ らいごみるえる ききれるお れみひ』……」

「どうだ！」

「ふっかつのじゅもんがちがいます

「またかよ、あーもう……」

コントローラーをポイと投げて、日本酒を呷った。ピリツとした辛口とすっきりしたのどごし。そういえば親父も日本酒が好きだったな、と思いつつ、古めかしい、ところどころ変色した紙に書かれたミミズ文字を見る。そうだ、あの日に日本酒なんて飲まなかったら俺はこんなことしなくて済んだんだ。そう思うとなぜか余計に酒が進んだ。

今日、実家に用事があり久々に帰ったついでに押し入れをあさってみると、ゲーム機とソフト、それとメモを発見した。それは昔親父と遊んだRPGで、懐かしくなった俺はそれを持って帰った。中学に入ってからすぐに失踪した親父。その親父が残したふっかつのじゅもんが書かれたメモ。泣きながらコントローラーを操作して親父はもう帰ってこないと知ったあの日を思い出して、思えば遠いところに来てしまったなあ。と酒瓶を見て思った。結局親父は失踪したまま、数年前失踪申告届けを出して、親父は鬼籍に入った。

「……あー、やっぱ無理か」

持ち帰ったゲームをセットして、まだ動くことに少し感動しつつメモを見てふっかつのじゅもんの入力をするがやはり失敗のメッセーじが流れる。

「ただいまー！」

ガチャリ、と玄関の開く音と共に元気な声が聞こえた。バタバタと騒々しい足音が近づいてくる。

「あ、父ちゃんなにそれ?!」

振り返ると野球帽にドロドロのユニフォームを着た、小学校三年になる息子がキラキラした目でテレビにセットされたゲーム機を見ていた。

「ちょっと、まずは脱衣所! その汚い服を脱ぎなさい!」
「んもう、いま行こうとしたところだよぉー」

続いて入ってきた妻の一喝にだるそうに返事をして、息子は脱衣所へ向かった。そしてすれ違いで妻が入ってくる。

「お義母さん元気だった? …… って貴方、もう呑んでるの?」

妻がテーブルの日本酒を見て眉をひそめた。時刻は午後五時。残暑厳しいこの季節、外はまだ明るい。

「休日ぐらい許せよ、母さんは相変わらず元気すぎて相手するこっちが死にそうになるぐらいだ」

「……私は一日中、この暑い中少年野球の母の会の手伝いで忙しかったのに、貴方は実家帰って家では一人でお酒呑んで……」

「あー、もう悪かったって。ほら、お前も呑めよ」

そう言っただけが使ったグラスに日本酒を入れて差し出すと、妻の拗ねた顔がほころんだ。美味しそうにグラスに口をつける。

「んー、日本酒は辛口よねえ。…… あら、そのゲームってもしかして……」

「ああ、そうそう、実家の押し入れにあって持って帰ってきた。懐

かしいだろ？」

「へえ、まだ動くんのだ。もうそれ何十年も前のやつでしょ？」

「俺も驚いたよ」

「え、なにそれゲームなの?!」

脱衣所から息子の声が聞こえる。どうやらこちらの会話が聞こえていたようだ。

「父ちゃんの子供の頃のゲームだよ、風呂入ったら見せてやる」
「すぐ入る！ 待ってて!!」

声がしたかと思うと風呂の扉の閉まる音がして、すぐにシャワー音が微かに聞こえてきた。

「そういえばそのゲーム、お義父さんがふつかつのじゅもんをぐちゃぐちゃに書いてラスボス前で詰んで泣いたゲームよね？」

「お前って俺が話したそういう話ばかり覚えてるよな……」
「だってえ、おもしろいんだもの」

そう言う妻はケラケラと笑いながら椅子に腰掛け、空になったグラスに日本酒を注いで呑み始めた。グラスが取られてしまったので席を立ち、ついでにゲームの電源も一度落としてグラスを取りに行き、戻ってさてもう一杯と思ったところで息子が風呂から上がった。きた。

「ちょっとお、早過ぎでしょ。あんたちゃんと体洗ったの？」
「洗った！ ねえ父ちゃん早くそのゲームやろうよ！」

息子の目にはゲームしか見えていない。俺にも覚えがあつた。新しいゲームと聞くといても立ってもいらなくなり、なにもかも放

り出してとにかくゲームをしたいと全身が疼くようなわくわくした気持ち。

大人になった今もゲームをする俺だが、あのドキドキ感はもう感じない。ただ買って、プレイして、ああおもしろいと思うだけ。俺は息子が少しうらやましかった。

「よしよし、じゃあコントローラーはこれな」

「え、なんでコントローラーにコードついてるの？」

「あ、そうかお前据え置きゲームはWiiしか知らないもんなあ……」

こうじゃないの？ とコントローラーをぶんぶんと振り回す息子を見てジェネレーションギャップを感じる。それを見た妻はまたケラケラと笑い、「時代は変わるわねえ」と笑いながら言った。

「これはWiiで振り回さないで操作するときと同じように操作するやつなんだよ。ほら、Wiiのコントローラー横にしたのと同じだろ？」

言いながら息子にコントローラーの説明を簡単にしてから、ゲーム機のスイッチを入れた。懐かしい、少ない和音で奏でられる電子音のテーマソング。

「あれ、オレなんかこれ聞いたことある気がする……」

「ああ、このゲームはこの前お前に買ってやったDSのゲームの、シリーズで一番最初のやつだ」

「え？！ じゃあ装備で見た目変わったりするんだ！！」

「……あー……いや、それはない。それどころか人に話しかけるのにも一手間かかる」

あれから何十年、時代は変わる。ゲームだって変わる。失踪した親父も死んだことになった。

画面にはゲームタイトルと、START、CONTINUEの文字が並ぶ。

「ねえ父ちゃん、これ、えっと、えすていーえーあーるていーを押せば始まるの？」

わくわくした目でこちらを見る息子。何十年前、俺はこんな顔をして親父を見ていたんだろうか？

何度も何度も選択したCONTINUEはもう終わりだ。今日からは新しく、息子と冒険を始めよう。

勇者の血は受け継がれる、そして伝説は始まる。

「そうだ、それを押せばいい。今日からは父ちゃんと冒険だ」

俺も親父譲りの悪筆だけど、ふっかつのじゅもんは丁寧に書くと思う。特にラスボス前は入念に。

FIN

（後書き）

この小説はアメーバブログ内ピグ部活「物書きの集い」の九月宿題「哀愁」をテーマとして書いた小説です。

知人の哀しき実体験を元に想像に想像をふくらませて書いてみました。

メモが読めないのも悔しいと思いますが冒険の書世代の私は「お気の毒ですが冒険の書は消えてしまいました」のほうがトラウマです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9040n/>

そして勇者は受け継がれる

2010年10月9日20時58分発行